・月刊神戸っ子創刊三〇〇号記念座談会

国際化の原点を探り、外国との関係を新しく再構築する努力を

宮崎　辰雄〈神戸市長〉
牧　　冬彦〈株式会社神戸製鋼所社長〉
大西　　胖〈川崎重工業株式会社副社長〉
日根野鐵雄〈三菱重工業株式会社神戸造船所長〉
鈴木　謙一〈経済評論家〉

――神戸は来年開港一二〇年を迎えます。戦前から鉄鋼造船、あるいは海運業によって神戸経済は繁栄をして来ました。しかし時代とともに産業構造が大きく変わろうとしています。この激動期に当たって、神戸は国際社会のなかでどう生き抜いて行けばいいのか。今後への提言を合わせてお話しいただきたいと思います。

激動期を生き抜くための〝複合経営〟

宮崎　辰雄神戸市長

鈴木　謙一さん

日根野　鐵雄さん

大西　　胖さん

牧　　冬彦さん

宮崎　私は神戸の産業は鉄鋼・造船という基幹産業で発展すべき都市だと、戦前からそう思っていました。戦後も初めの頃は、そう思っていたのですが、大分様変わりがして来ましたね。企業の規模が大きくなって、神戸では立地出来ないということや、公害の問題があって、川崎製鐵さんは千葉や水島へ出られる。また神戸製鋼さんは加古川へというようなことで、随分と様変わりしましたこのままではいけないと途中で思いましてね。

そこで神戸を支えていた基幹産業に変わるものをつくり上げて行かないといけないと、そう思ったものですからポートアイランドにファッション産業を誘致し、さらにコンベンション施設をもって来ました。また内陸部の西神ニュータウンでは、大きな更地が出来たのでその一部をインダストリアルパークという工業団地にしました。ここには規模の大小ではなく、先端産業、ベンチャービジネスを誘致するという考えでやって来ております。これはそれなりに成功したと思います。

出来るなら基幹産業自体も多少規模が小さくても付加価値が高く採算のとれるようなことをやっていただきたいと思いますね。従来からの基幹産業を残して行かないと、神戸の町のイメージが変わってしまいますからね。

私としては鉄鋼・造船とファッション・コンベンション産業の両方で神戸を支えて行きたいと、欲得しいことを考えているんです(笑)。つまり多種機能型複合都市にするのだと私は言っているわけです。市議会でもそういう発言をしており、大分皆さんにも分っていただけるようになって来ました。

従って諸企業が立地出来るような場所を造ること、それへの交通機関を整備するという考え方で進んでいます。

牧　戦後、製鉄業では、当然、技術革新も不断に行いながらも、どちらかと言えば、規模のメリットの追求を、ずっとやって来たと思います。

たまたま私どもは会社誕生以来、神戸市とともに歩んで来ております。まず発生の神戸を起点にして活動して来ましたのが昭和三十年代までです。四十年代になりまして、主として地理的条件で神戸市の枠外に出て行かないといけないようになったわけです。そういう形で発展して来ましたが、ここに来て世界的な時代の変わり目に際会して、私ども自身をどう変身させて行くかということで非常に頭を悩ませているわけです。

いずれにしましても従来と同じような直線的なコースで私どもの仕事を伸ばして行くことは最早出来ません。しかし、さりとてわれわれはやはり社会のための一番のベースとなるような基礎づくりをやるという仕事の任務は変わらないでしょうし、そういうものをあくまでベースとしながら、これにどういう形の枝葉をつけて行くかをわれわれとしては考えて行かないといけないと思っています。

従いまして発展の方向と言いますか、将来のイメージを考えると、今市長さんがいみじくもおっしゃいました多種機能型複合都市というお考えは、われわれ企業にとりましても意味あることだと思います。当社は早くから複合経営と言うことでやっているわけですが、ものを変身させて行くときには、そういう形をとらないとうまく行きません。ですから、市長さんの提唱に大変関心がありますし、企業運営の上に参考に、あるいは指針となるようなものが得られるのではないかと思っています。

日根野　三菱重工業の神戸造船所は、三菱重工の中では歴史的には長崎造船所に次いで二番目に出来た造船所になります。

ところが立地条件もありまして、もともと私どもは、中規模の造船と同時に、搭載する機械類の製造をやって来ています。昔から原動機事業所ということでやって来たのですが、戦後、鉄、その次にエネルギーの時代を迎え、日本の発電所建設が盛んになり、それからオイルの時代、原子力の時代と、それにうまく私どもは追随出来まして、今は加圧水型原子力発電プラント機器の製作は日本では三菱重工を中心とする三菱原子力グループだけがやっており、神戸造船所は、その中心の事業所として動いています。神戸造船所では原子力発電プラント機器の生産高が半分以上を占めています。もともと造船の分野が小さいということもありましたが、比較的に多角経営化して今日までやって来れたと思っています。

これからは、色々と難しいことがあるかと思いますが、私どもは今までの経験の上に立って、やはりエネルギーと比較的中小型の付加価値の高い造船、さらに潜水艦も造っておりますので、潜水艦建造技術を活用した深海調査船のような有人・無人潜水機、そういったものとの技術をベースにした上に、新しい昨今の技術を加えた方向で進んで行きたいと思っています。原子力も昨今軽水炉が主流となっていますが、次には高速増殖炉が、さらに核融合炉が来るだろうと言われております。そういったものにうまく私どもの体質を合わせる方向でやって行きたいと思っています。

大西　われわれも神戸製鋼さん同様、会社の生まれたときから今日まで、いわば神戸市と共に歩んで来たと言いますか、神戸市に育てられ、神戸を揺籃の地として来ました。その意味で、造船・鉄鋼という日本の重工業の発祥の地の一つが神戸だと思います。神戸がそういう立地条件に恵まれていたということもありますが、歴代の神戸市の施政者、あるいは市民に支えられて、立地を十分に生かして、過去の日本の重工業発祥の歴史的に数少ない成功例になり得たと思っています。

たまたま川崎重工は個人経営時代から数えまして今年でちょうど百年になります。造船に始まって、車輌、あるいは製鉄とか汽船、航空機へと段階的に発展して来ました。

これは一つのエピソードですが、ニューヨークの地下鉄を受注して、向こうで大変好評を得ています。これまで車輌部門で蓄積された技術でもってニューヨークの地下鉄車輌を造ったのですが、これがきっかけとなりまして、今度はニューヨーク、ニュージャージー両州のポートオーソリティから昨年、別の地下鉄プロジェクトのご注文をいただきました。私がそれの調印式に行きましたときに、ポートオーソリティの方々を前にして、われわれは約百年前に神戸港の一角に誕生して神戸港の発展と共に発展して来た、今度、ニューヨーク、ニュージャージーのポートオーソリティからご注文をいただいて、これから長くニューヨーク港の発展のために協力させてもらいたいと申しあげ喜ばれたのですが、最近は何かにつけて現地生産をやらざるを得ないという状況があるもので、車輌の組立工場をニューヨークの郊外に開設しました。わが社の車輌部門の分工場がニューヨークに進出したということです。

神戸市に育てられ、色々な変遷を経て神戸という土地の枠をはみ出して、工場を他所へ立地するようになり、国際化時代の昨今、車輌の例など海外へ立地することも出て来ました。しかし、もとはと言えば神戸で育った企業。現在の不況を乗り切って、新しく展開して行くということを考えたときに、やはり原点に返って、明治以来の日本の重工業の発展と共に発展して来たわれわれとしましては、重工業から出て来た多種機械工業ということで、企業としての同一性を維持しながらも、新しい時代のハイテク展開、あるいは先端技術装備などを心掛けて、例えば西神工業団地などで新しい部門を展開して行き、神戸市と共に発展して行く方向を志向したいと考えています。

鈴木　市長さんのおっしゃった多種機能型複合都市という言葉の中に未来の足掛りがあるように思います。

企業経営という立場で考えると、これはきわめてグローバルな視点になるわけです。グローバルと言いましても、三社のお話を伺っていますと、多角経営化という方向で〝変身〟の準備をしておられるようです。とりわけ三社の神戸に立地している立場では、同じ重工業と言いましても、単にスケールメリットというだけではなく、本来的に付加価値性の高い特色ある分野を担当されておられるのではないかと思います。

神戸地域の三社がやっておられるのは、ソフトな面が多いのではないのか、そういうものが今後とも生かされて来る、そういう時代ではないかと思います。

そのあたりに市長がおっしゃる多種機能型複合都市の展望と、神戸における企業活動がうまく結びついて来るのではないでしょうか。

次の論点としてハイテク化という問題と国際化という視点をもう少し突っ込んでお伺いしたいと思います。

と言うことは、コンベンションシティ論もそうですが本当の意味の国際化は国と国との関係ではなくて、それに先行するのは企業と企業との結びつきであり、地域と地域との結びつきであり、人と人との結びつきです。つまり民間交流が主流になるわけです。神戸は国際化の先兵となる値打ちは十分にあり、その意味でも企業は大きな機能をもてるのではないかと思います。そういう国際化の視点から理論を展開することも必要だと思います。

真の〝国際化〟とは何か

宮崎　国際化というのは非常にポピュラーな言葉ですが、その内容となると仲々難しいですね。国際化は、神戸が開港以来、ずっと目標にして来たことですが、まだ十分な国際化がされているとは思えません。日本全体がそうですね。産業や貿易は強いですが、もう一つ大きな国際化というものに対しては日本全体が弱いのではないかと思いますね。だからアメリカから要求されると貿易摩擦の解消にあわてる。独自にやることがないですね。この点、私どももどうすればいいのかを考えないといけないと思っているところです。

その一端として、一つは国と国との外交は私たちの手に負えませんし、また職務が違いますから、各都市同士の交流を高めるために姉妹都市・友好都市の提携を進めて来ましたが、これはうまく行っていると思います。

たとえばソ連、中国と日本政府がエキサイトしているときにも、われわれはリガ市、天津市という都市間で、教師の交換とかやって行くと、少なくとも都市間では緊張はありませんね。

実は私は神戸に国際的な体育大会をもって来たい、それも初めはオリンピックをと思っていたのですが、名古屋が先に名乗りを上げたので、じゃ規模で二番目のユニバーシアード大会を誘致するということで、昨年の夏、神戸で開催しました。

これは大成功でしたが、これによってユニバーシアード大会自体が世界的にも注目されるようになったようです。

これより先、ポートピア'81では一、六一〇万人の人が神戸に来られましたが、その内の二〇万人は外国からお見えになりました。これらは国際化という方向に沿うのではないかと思っています。

神戸の企業の中でも大分外国企業が神戸で仕事をするようになって来ましたね。まだこれからではありますが、産業の国際化が少し芽をふいて来たのではないかと思います。それと共に、発展途上国の若い人たちのなかには主として経済的な理由で勉強が出来ない人が多いのですが、そういう人たちへの援助もやっています。神戸へ招いて勉強を十分にしてもらう。それと同時にホームスティなどで日本人と接触をしてもらって、友好を促進させることも考えています。ちょうどポートピア'81で六十五億円ほどの金が残りましたので、それを基金にして外国から呼ぶようにしているのです。今、大分、学生の数も増えています。今度は宿舎を建てようと考えています。こういうことをやって、少しでも国際化に役立てたいと思っているんです。

牧　国際化という言葉自体の本当の意味が問われる時代ですね。

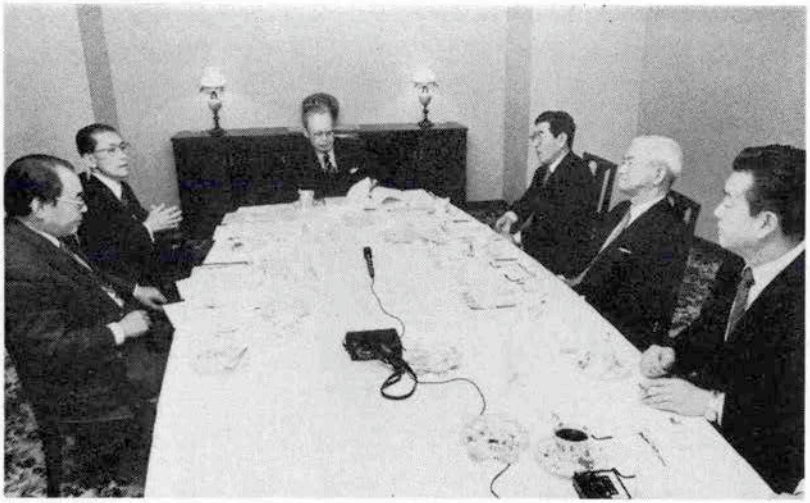
神戸という所におりますと、外からの風が抵抗なしに入って来るという感じです。昔からそういう都市だったと思いますが、今言われている国際化の本当の意味は、もう少し堀り下げたところで議論をして行かないと、ただ何となしに町の雰囲気が外国風であるというだけでは、これはダメなんで、そこに一つの難しさがありますね。

経済とは本来、国境のないものですから、どこまでも広がって行きます。だから経済人である限りは、国際化であろうとなかろうと、グローバルな考え方でやって行かないといけないわけです。大正時代の鈴木商店がそうですね。あの当時、国際化という言葉はなかったでしょうが、鈴木商店の戦略には、ちゃんと地球儀があったでしょうね。経済の本質はそういうものだと思います。

にも関わらず今日、貿易摩擦というような形で日本が世界中の非難の的になっている。われわれ経済人として日本経済を世界に広げて行くとき、何か問題のあるやり方をしてきたのか、と自分自身で考えてみますと、これは身最眉ではありませんが、われわれは決してそういう覚えはないわけです。伸びるべくして伸びたものだと、思っているのですが、しかし、その結果として今日、日本経済の力強さが逆に非難の的となっている。アンフェアだという非難が、われわれに加えられている。彼らの言うアンフェアだとはどういう意味かということを考えるとき、本当に国際的な感覚が必要になって来ると思うんです。われわれのやっているビジネスが詐欺的行為を伴っているとか、何か不道徳だとか、そういうことでは決してないと彼らは言うわけです。結局、アンフェアということは、単にビジネスだけではなく、日本の政治、国民性、そういったすべてのものを含めて、俗っぽく言えば我田引水というか、相手との関係をはっきりと確めないでことを行なうとか、そういうことへの非難に発展

しつつあるわけです。

日本人は世界中に出て行きますが、相手と日本との正当な関係を計り切らずに、自分一人でことを行っているような感じになっています。こういう点が相手側から見ると悪い印象となるのではないでしょうか。そのへんのところを色々考えてみますと、われわれは国際化するということにおいて自分自身をアメリカ人のように、ドイツ人のようにしてゆくという風に一生懸命めざして来たのですが、その結果、外国人から見た日本人が、何か得体の知れない者と印象づけられるようだったら、これは由々しい問題です。



21世紀の神戸像をめぐって話がつづく

真に国際化するということは、日本人としてのアイデンティティとは何か、外国との関係をどういう風に構築して行くかについて、本当に自分自身に問いかけることだと思います。そうでなかったら今日、日本の対外的な国際関係を正常に戻すことは出来ないだろうと思います。

明治四年に岩倉具視を団長にした大調査団が世界を歩きましたが、そのとき彼らは、今日のカルチャーショックと言うような生やさしいものではないショックを受けているわけですね。しかし彼ら自身のアイデンティティはしっかりともちながら、すごい調査報告を残している。びっくり仰天の連続の中で、しかし彼ら自身はちゃんと自分というものをもっている。そして彼らはそれなりの尊敬を受け堂々と世界を旅して来た。これは一体何であったのか、というところにわれわれはもう一度戻らないといけないのではないかと思っています。

日根野　私ども神戸造船所ではよく三菱重工の他の事業所から人を受け入れるのですが、神戸へ移って来られる社員は非常に定着力がいいということがあります。

もともと神戸には他所の人を受け入れやすい資質というものがあるのではないか、という気がします。国際化ということについては、すでにその土壌が育くまれているのではないかと思います。地域全体に開放的な雰囲気がありますね。

企業として昨今私どもがやっていますことは、たとえば造船所の技術協力。どういうことかと言いますと、私どもの造船所の中を、たとえばアメリカやスペインの造船所の方に見ていただく。その上でいいところを取り入れていただくということで、自分たちのもっている技術を外国にどんどん開放して行くということを心掛けてやっています。

今まではプラント輸出が主体だったのですが、これからはこのような方法がいいのではないかと思います。

大西　実は一昨日、新しいガスタービン推進プラントが完成し、それのお披露目をしたのですが、防衛庁の方々、その他日本のお客様のほかに私どもの艦艇用ガスタービンプラントで技術提携をしている英国のロールスロイス社の幹部、さらにこれを採用している英国の海軍の高官、英国大使館の代表などが出席され、日英交歓の様相を呈しました。われわれの造船業は、昔は英国などの先進国がお手本で、段々と発展し、今や一人前となって先輩と肩を並べ、あるいは追い越すようになっております。また一方で東南アジアなどの発展途上国からの技術研修を受け入れるということで、海外の人との往来は依然として多いわけです。

日本人と諸外国との交流は、あるときにはギクシャクしたものであったかも分りませんが、基本的に日本人が誠心誠意で海外の人とつき合うことが経済摩擦解消ということに一番効果があると思います。

とくに英国の人に感じましたのは、ビジネスの面でたまたま利害が一致しているということもあるのでしょうが、非常に丁重にわれわれに接触されて、日本と英国との昔からの友好関係をすぐに口にされ、われわれは友人であると言うわけです。古いフレンドシップを個人ベースで非常に大切にしている。明治期の日本人は、今のわれわれよりもうちょっとポライトネスに優れていたのではないかと思ったりしますね。戦後、エコノミックアニマルといわれたように、われわれの側にも反省すべき点があるのではないかと思います。

神戸の市民は昔から国際性という点では、他の都市には見られない何代かにわたる伝統が泌み込んでいると思いますね。これを大切にして海外の人を受け入れることによって、日本の国際化の模範になるような市民の素質はあると思います。

これは細かいことになりますが、発展途上国から長期間出張で勉強に来る人が最近増えていますね。そういう人は料金の高いところへ泊まれないものですから、経済的でしかも快適な宿舎にお世話するのに、われわれ非常に苦労しています。そういう人のための施設を神戸市の方でお考えいただければ非常に有難いと思います。

次代のために〝神戸産業博物館〟の創設を

宮崎　神戸市民のいいところは、生まれつき、本質的に国際性というものを多少ともっているところですね。外国人に対して排斥する気持ちがないんです。戦時中でも六甲山などに大分外国人が住んでいましたが、平気で往来していました。憲兵には叱られましたけどね(笑)。

だから国際性というものを取り入れるのに少しも躊躇しない市民性がありますね。

牧　これは歴代の市長さんの一貫した方針の結果だと思いますが、戦後、神戸市は他の都市に比べまして、復興が遅れましたが、しかしいったん復興が緒に着き始めてからは、町づくりの方針は一貫していたと思います。年を追う毎に町のイメージがよくなって行きました。そういう意味での生活環境としては、私が以前に住んだことのある東京、大阪、京都などと比べても比較にならないぐらいに神戸はよくなりました。

しかも神戸市の二十一世紀をめざす長期計画を拝見しますと、まだまだ町をよくして行こうという野心的な計画を打ち出しておられ、海外からの受け入れという面からもぜひとも実現していただきたいと思います。

全市公園化といいますか、神戸はそういう絵の画ける空間のある都市ですね。他都市と比較してみますと、そういう点でのゆとりといいますか、やりようによってはどのような絵でも画けるという楽しさがあります。

だからこれであと二十年、一貫した方針の下に開発されて行けば、本当に素晴しい都市になるだろうと思います。これは神戸に三十年住んでいる私の実感です。

神戸のイメージは、むしろ国外で高い。KOBEという名前はすごく通りがいいですね。ジャパンよりもいい(笑)。

鈴木　国際化についての一つの重要な課題は、移入が遅れているということですね。いかに入りやすい地域に神戸をするかというのが問題の一つ。とくにアジアに対するいい意味での指導性を考える場合、東南アジアから学生を受け入れたり、企業の技術を転移するなど大きな役割があると思います。

今、目先だけを見ると輸出関連の企業だけではなく外人居住者も円高で困っているのですが、この機会にむしろ、諸外国を受け入れる経済的な環境整備が出来ますと、神戸の飛躍が大いに期待できるのではないでしょうか。

牧　過去の不況期においても神戸市は一貫して公共投資をやって来られた。これは素晴しいことだと思います。

市長さんのお話しにもありますように、神戸市の基本路線はすでに決まっているわけですから、これからは私ども自身、企業のあり方を変えて行かないといけないところに来ています。言葉は、ハイテクだとかファッションだとか色々ありますが、要するに世の中が万事に高級化して行く中で、われわれが提供する資材もそれに即応した形で高級化させて行かないといけないということです。そういう方向へ企業のあり方を変貌させて行きたいと思っています。

今や戦後の日本経済が初めて遭遇する大転換期ではないかと思いますが、しかし、もう十年、あるいは十五年といった先々には相当な技術の花が開く、そういう時期が恐らく来るだろうと思います。そのときに、われわれが蓄えた色々なノウハウをそういった状況にマッチさせて、花開かせることが出来れば、と願っております。そのため当面は何とか我慢をして切り抜けて行かないといけないと覚悟を新たにしておるところです。

大西　市長が冒頭に言われた多種機能型複合都市で神戸市政をおやりになるのだから、われわれ神戸に生まれ育った企業としても変革の時代に対応して、多種機能型複合経営をめざして神戸市と共に明日の発展を期待して行きたいですね。

日根野　神戸港には世界の豪華客船が入って来ますが、考えてみますと、日本で造った船は一隻もないわけです。日本の造船技術は世界一なんです。にも拘らずなぜああいう客船が出来ないかと言うと、要するに内部のインテリアのセンスが残念ながらまだ欧米並みになっていないからです。

神戸市が全体としてセンスにもっと磨きがかかれば、自ずとインテリア技術のセンスもよくなり、われわれの手で豪華客船が造れる。これが一つの夢です。

宮崎　最初に申しましたように鉄鋼・造船各社に対する期待には今後とも絶大なるものがあります。神戸の繁栄に今後とも尽していただきたいですね。

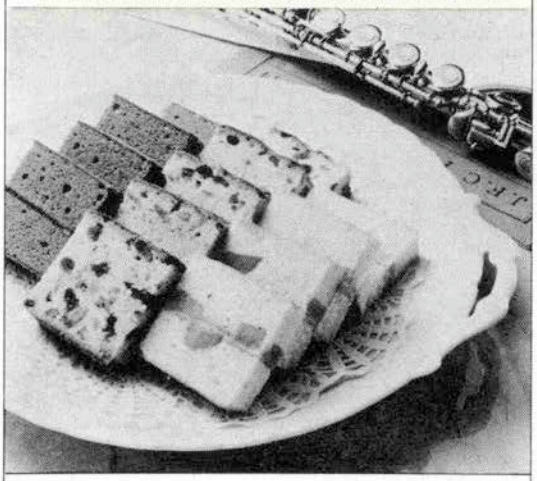
神戸は変身しようとしているのですが、私の仕事のやり方というかモットーは、激変緩和です。急激な変化を来たすと色んなきしみが出て来ます。出来るだけ徐々に変えて行く、ということをやっております。人間は長い間かかって生活のリズムに対応して来たのですからね。

神戸の場合は今のままで大分、変って来ましたので、これをさらに推し進めてやりたいと思っているのですが、そのためには地元の企業に協力していただけなければ、仲々出来ないことです。その点を皆さんにお願い申し上げておきたいと思います。

地域のことは地域の手で、〝バイ・コウベ〟で今後ともやって行きたいですね。

鈴木　今は激変期だけに温故知新ということが必要だと思います。明治以来、先進的な役割を産業が果たして来ました。だからこれは一つの提案ですが、産業博物館というようなものをつくって、神戸市民に神戸は何であったのか、また、何であろうとしているのか、ということをハッキリと自覚してもらえるような方法をとることを考えてみることも必要ではないかと思っております。

（神戸ポートピアホテルにて）



おいしさのトライアングル

トリオネット

フルーツ・マロン・チョコレート
3つのおいしさを芳醇なリキュールと
一緒に焼きあげました。
ひとつひとつが香り高く、ソフトでしっとり
した味わいを奏でます。

ユーハイム

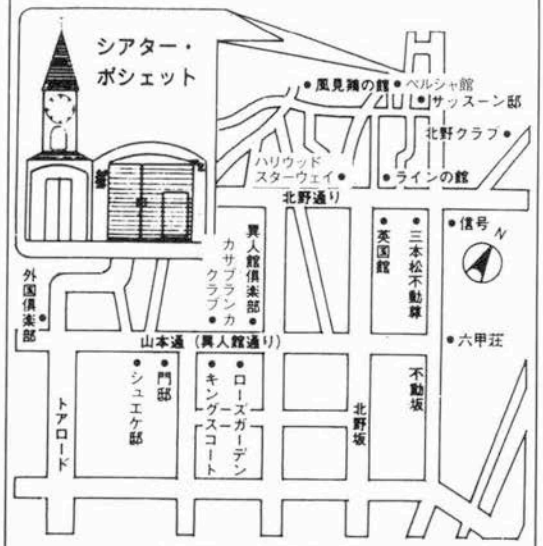
実験交流サロン

シアター・ポシェット

4月の公演

2日(水)
3日(木)
4日(金)　劇団神戸公演　オンナ　6つの愉しみ

8日(火) 18：30 永六輔　マルセ太郎公演
20日(日) 15：00 邦楽演奏会　尺八・箏
26日(土) 18：00 チャリティコンサート
中島常乃ほか



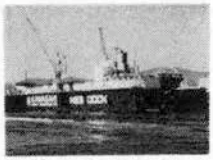
★シアター利用のご案内

●曜日、時間／土、日曜日（通常）A.M.10：00—P.M.8：00
●費用／ホール設備の使用無料。光熱、空調、管理費のみ実費
●付帯設備／グランドピアノ・エレクトーン・録音、音響機器、ミキサー、照明コントローラー・テープレコーダー、マイク、映写機等
●お申し込み、お問い合わせ
そごう前センター街東南角、さんちか入口
〒650　神戸市中央区三宮町1丁目5—1　住友銀行ビル6F
佐本小児歯科　佐本　進　☎ 331—6302～3

経済ポケット ジャーナル

★神戸港に最新鋭大型浮ドック完成

川崎重工業株式会社（本社・神戸、東京）がこのほど、神戸工場に、最新鋭の大型浮ドックを設置し、稼働を開始した。



世界トップクラスの浮ドック

これは、フローティングドックとしては、日本では二番目の大きさで、コンテナー船、LPG船から最大12万DWTの大型タンカーまでの船舶が入渠可能となる。大型トラベリングドックアーム（動く足場）4基、高圧自動洗浄装置をはじめ最新鋭設備を搭載し高品質の確保と、工期短縮をはかっている。

建設資金約50億円をかけたこのドックの完成により神戸港がより一層充実した貿易港となることに期待したい。

★フラワーロードに〝花ホテル〟オープン

平岩弓枝女史の作品で、山本陽子主演TVドラマにもなった『花ホテル』（株式会社平神ビル、ホテル事業部・平井朝子）がフラワーロード、三宮駅山側徒歩1分の地に、女性をターゲットにしたビジネス・ホテルをこの6月7日オープンする。可能な限り広めに部屋をとったから余裕の43室（和室あり）、しかもステーキハウス、契茶、ラウンジ、ブティックとシティホテルなみの充実度。神戸ホテルラッシュの先陣をきる！只今、プランから実動の部分に移って詰めの段階。

完成予想図

オープンにむけて〝花ホテル〟は胎動中、オープニングが大いに楽しみ。

□連絡先／花ホテル開設準備室 078（221）1087まで

★ヤング向けにOPEN キャンパススクエア

西区にある研究学園都市の商業施設「キャンパススクエア」が、3月28日オープンした。

ますます栄える学園都市

鉄筋コンクリート3階建（店舗面積約9千㎡）。学生を中心としたヤング向けのアメリカ調の店43店が入っている。また、同スクエア前には、ユニバーシアード神戸大会の金メダリストの栄誉をたたえたモニュメントが設置されている。

オープンに先立ち、27日には、米・フィラデルフィア市の代表を迎え、披露パーティが開かれた。地域コミュニティとキャンパスをターゲットに、ヤング層に絞った商法を展開しそう。

★P・C・K会員募集中

P・C・K（パールシティー神戸）キャンペーンを総合的に企画運営する組織として「P・C・K」推進協議会が四月に発足した。

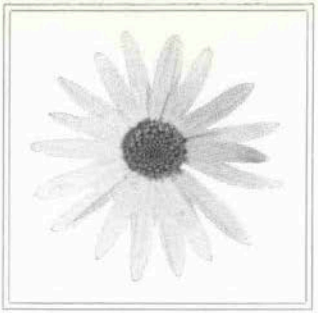
会員には一種と二種があり、一種は真珠関連の個人または法人で入会金一万円年会費三万円。二種はこのキャンペーンに賛同する個人または法人で同五千円と一万五千円。同会では、とくに二種会員を広く募っている。

□連絡先／タカハシパール 221－6656（高橋洋三）

★KOBEオフィスレディ★ 盛（もり） 由起子さん（23）

〈三井倉庫港運㈱ 神戸支店勤務〉

ミッションスクールの愛徳学園を卒業後、この会社に入って丸5年。現在、輸出管理グループという部署で事務の仕事をしている。「やりがいのある仕事だし、社内の人間関係もスムーズでとても満足しています」明るくて素直と、周りから評されているが、自分では、口のわりには気が小さいと控え目。「以前はひとりで喫茶店にも入ることが出来なかった」という彼女の趣味は、人と騒ぐこと。寂しがりや？　のさそり座、A型。



■月刊神戸っ子300号記念対談

女優にとって全ての結果は舞台です

杉村春子〈女優〈文学座〉〉 vs 川瀬喜代子〈にしむら珈琲店オーナー〉

神戸文化ホールで二月末に催された文学座公演の〝欲望という名の電車〟はこの公演で五百回を超えた。杉村春子さんは昭和二十八年以来ずっと主役のブランチ・デュボアを演じ続けている。昭和十二年の文学座創立に参加以来五十年間、看板女優として文学座と共に歩み続け多くの俳優を育ててこられた。

神戸公演の合い間に、杉村さんのファンである川瀬喜代子オーナーと北野町のにしむら珈琲店北野店で対談が始まった。

「ブランチ役も演るたびに理解が深くなるわ」と杉村春子さん。

★杉村さんは人間じゃないの。神さまなの。

川瀬 今回もまた素晴らしい公演を見せていただきましたが、この〝欲望という名の電車〟のブランチ役は、杉村さんが一番好きだとおっしゃっていましたね。「女の一生」布引けいや「華岡青洲の妻」於継も好きだけれどブランチが一番好きだとおっしゃったのが印象的でした。ブランチは翻訳物の主人公なので意外な気がしましたが。

杉村 日本人が翻訳劇を演る場合、一番理解しにくいのは宗教の問題だと思うんです。むこうでは宗教が生きていくことと切り離せなくなっているでしょう。

川瀬 外国では宗教の問題が原因で戦争が起きますが、我々には考えられないことですね。

杉村　私達にとっては、もちろん信仰の厚い人もいらっしゃるけれど、わりと関係なく暮らしている人が多いですものね。だから宗教の問題が中心だと難しかったり、上流階級すぎる話は風俗習慣が異なりすぎて演りづらいことはありますが、庶民の生活にはそうちがいがないんじゃないかしら。以前、チャップリンの映画の中で〝朝起きると葡萄がたわわに実り、牛が出て来て乳を絞る……〟という夢のシーンがあったんです。それを観てこれが人間のもとになる幸せだなって思ったの。お日さんと最小限の食べ物――人間のもとといえる幸せは皆一緒じゃないかって。それから楽になりましたね。

〝欲望……〟のブランチが好きなのは、女の性（サガ）、というかありとあらゆる思い――これは皆が本来持っているんですけれど、それが出せるから面白いんですね。情念の世界に生きた女って面白いですもの。「女の一生」の布引けいは情念を押し殺して生きる女の役ですからね。

川瀬　〝欲望……〟はこの公演で五百回を超えられたそうですが、杉村さんには「女の一生」「華々しき一族」「ふるあめりかに袖はぬらさじ」「華岡青州の妻」「鹿鳴館」など実に当たり役が五つも六つもおありですね。しかも「日々新しい発見があるので楽しくてしょうがない」とおっしゃっているのを聞いて感激しました。

毎回、ご自分の役柄を堀り起こし、膨ませていくことができるから何百回と上演できるわけですね。

杉村　ブランチは大変台詞が多く、その時々には理解して演っているつもりが、次回演ってみると前回のは本当にわかっていなかったって思うんです。

川瀬　女優さんの中には、「毎回同じことの繰り返しで、舞台は面白くないわ」とぼやく方もいらっしゃいますが。私共も喫茶店という商売を始めて三十八年になりますが、やはり毎日の積み重ねが大事だということを強く感じます。ただ仕事としては毎日が同じことの繰り返しなので若い従業員は二、三年もすると飽きるようですね。

杉村　仕事を持っていると、家庭の奥さまも同じだと思いますが、決して毎日毎日同じじゃないんです。変わっていっているんです。ただし自分で求めなきゃあいけません。人が与えてくれるのを待っててもだめです。自分で変えよう、こうしようと思わなきゃいけませんね。何々してくれない、何々させてくれない、というのが意外に多いですね。どうして精進しないのかしらね。

川瀬　全く同感です。教えてもらえないと言われてもうちは学校じゃないんだから、自分で仕事を見つけないといけないと思うんです。

万事がそうで、何かひとつ困難に出会ったとき、背中を向けて逃げてしまうと逆に苦労が追いかけてくるってことがあると思うんです。

杉村　そう、逃げよう逃げよう、とすると追いかけてくるもんなんですよ。人生

「奈良岡さんが〝杉村先生は神さまなのよ〟っておっしゃって…」と川瀬さん

では何も問題のないことの方が少ないのですから、それから逃げていてはだめですね。

だから私は、嬉しいことのある日の前日が一番幸せな日だって思うんです。嬉しいことが現実になる時には又異なる問題が起きることが多いですからね。

私は何があってもいつも平気そうな顔をしている――なんて皆さんおっしゃるけど、いちいち気持ちをグチャグチャにしていたら、たまりません。自分で気持ちを変えていかないと……。初めからそんなに強い女じゃないですよ、みんな。私だって強くないけれど、自分で何もできなくなってしまうと困りますもの。

川瀬　そりゃあ、皆さんを引っ張っていかれる立場ですものね。それでも、この細い体で、タフですね。旅から旅への毎日で、ほとんどゆっくりされないでしょうに。

杉村　そうですね。家に落ちつくことはないですねェ。

川瀬　精神的にも、肉体的にも私などには考えられないタフさをお持ちですが、私も「杉村さんのようになってみたいわ」って以前、奈良岡朋子さんに申し上げたことがあるんです。そうしたら「あなた、杉村さんはね、人間じゃないの。神様なの。ああなりたいなんて思ってもダメよ」って言われました(笑)。

それで、先日お手紙をいただいたら〝風邪をひいて…〟と書いてらっしゃったので、ああ、神さまでも風邪をひかれるんだなって(笑)でも、本当に無理なさらないでくださいね。

杉村　それは、あなただって周りについている人がたくさんいるんだから同じですよ。

川瀬　先生が〝風邪をひいて、健康の有難さがわかった〟っておっしゃったけど、私も以前大病したのは、あまりに元気すぎて、周囲の人々も同じように考えて叱咤激励するものだから、神様が誰にも弱い時があることを教えてくださったんだなって。

★〝若い精神〟って興味と真摯に生きることね。

川瀬　私が舞台の楽しみを覚えたのも本当に先生のお蔭なんです。商売を始めてからずっと働きどおしでしたがつい七年位前からやっと余裕ができてお芝居を見るようになりました。先生の舞台は見せていただく度に魅かれて、後ろからついていきたくなるような気になります。

杉村　やはり、人間年をとることは悲しいですよね。ことに自分がこれまで生きてきたってことは、おしまいがあるわけだけど、おしまいがある、おしまいになると思ってやってたらどうしようもないでしょう。

しかし、私の場合これから三十年、五十年という先はないのも事実です。じゃあどうすればいいか。人にはそれぞれ異なった悲しさがあるわけだし……。

でもね、私やっと最近になってこう思うようになったんだけれど、川瀬さんも今は何軒も経営してらっしゃるけど第一歩があったはずです。誰でも最初の一歩から始めているんです。そして毎日毎日があって年月が経つわけで、一足飛びに十年は経ちません。私も毎日毎日演ってきて今日があるわけです。それで五年位を節目に考えてみると、前の五年より、今の五年の方が物事を深く考えるようになっているわけです。役者の場合だと、同じ一人の人間を演じても理解が深くなっていきます。

〝若い精神〟って物に対する興味が強いとか生きることに真摯だってことだと思うの。

川瀬　私も毎日新しいお客様との出会いがあって、新鮮な発見があり、同じ事の繰り返しでも楽しいんですね。

杉村　私は先ほど川瀬さんがいわれたように何回も演じれるお芝居をたくさん持っていて、とても幸せなんです。

今回の〝欲望……〟も九回目の公演で、同じブランチという三十代後半の女性を演じても、五年と十年前と今回では理解の度合がちがうわけです。肉体的にはやはりマイナス面がどんどん増えてきますから、それをどうやって補うかです。折角ここまでコツコツやってきたんですから……。私の場合、いろんな役を何回も長年やってきて実験することができましたからね。

やっといろんなことがわかってきた今、その結果は、

「杉村春子さんから、美しい身のこなしを身ぶり、手ぶりで伝授を受けるとは滅多にないチャンスです。」「ハッハッハッ」と和やかなおしゃべり風景
<にしむら珈琲北野店にて>

何で見せるか、といえば舞台です。ダメだったらお客さまが判断されるわけですから。

川瀬　全くおっしゃるとおりです。私の仕事でもお客さまが判断される結果が全てです。それだからこそ、一期一会を大切にしなければいけませんね。

それにしても先生の舞台には、若い女優さんでも絶対に出せない色気を舞台で感じることがあります。ちょっとした仕草やひとことの台詞を聴くだけで、〝ああ、観に来て良かった〟(笑)。「華岡青洲の妻」では杉村さんがずっと於継を演じられ加恵役はいろんな方が相手をされているわけですが、以前先生に、「ここだけの話ですが、どの女優さんが加恵さんの役に良かったですか」とお尋ねしたら、先生は誰ともおっしゃらず、小さな声で「両方とも私がしたかったわ」っておっしゃったんです。これが本当の自信だなあって私、感激いたしました。

杉村　ハッハッハッ(笑)。

川瀬　私、先生のそのよく透る笑い声が大好きです。それに先生は、殊に和服を召された時の身のこなしが本当にお綺麗なのでいつも見惚れています。何とか真似したいと思って、これでも一生懸命(笑)。お客様を送り出される時の挨拶の姿がいつもおきれいですね。それと椅子に座られる時の姿がきれいで、娘にも「お母さん、あんな風に座るのよ」と言われて(笑)独特のスタイルですね。

杉村　クシャッと座るんじゃなくて、見せたいお客様の方へ綺麗な線が出るように裾前を少し持ち上げ、腰を少しねじって座るときれいです。手の位置も気をつけて。

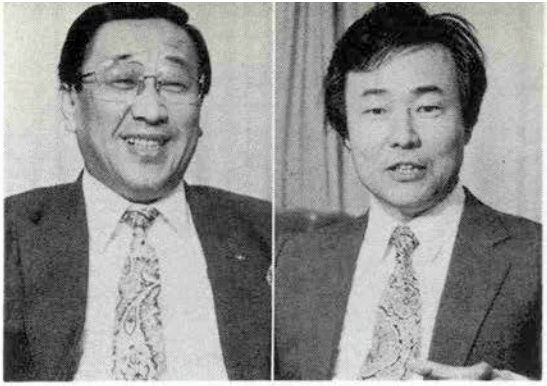
川瀬　なるほどねェ。今後真似させていただきます。お尋ねして良かった。それと先生は例えば電話をかけてらっしゃるときの後ろ姿も素敵ですね。

杉村　腰の上の筋をちょっと伸ばすといつも姿勢がきれいに見えるんですよ。

川瀬　「華岡青洲の妻」では鏡もなしで、サッサッサッと着物を召されますが、客席から思わずため息が出るほど見事でした。今後の舞台がますます楽しみです。

元町に界わい性と物語性の創造を

〈座談会出席者〉
武田　則明〈建築家〉
下村　光治〈元町街づくり委員会委員長〉
大谷　靖幸〈元町グループPR委員会委員長〉〈元町街づくり委員会副委員長〉
中川　清〈元町グループPR委員会副委員長〉
伊藤　忠徳〈元町グループPR委員会副委員長〉〈元町街づくり委員会委員〉
村上与利一〈元町街づくり委員会委員〉
島田　誠〈元町グループPR委員会広報担当〉〈元町街づくり委員会委員〉
司会・小泉　康夫〈月刊神戸っ子編集長〉



武田　則明さん　　下村　光治さん

——ここ二、三年、元町では新しい街づくりが活発に行われています。今回は元町の街づくりの現状とこれからの見通しについてお話をお願い致します。

元町への誘客には駐車場が必要

大谷　元町グループPR委員会は、活動を始めてから三年目に入りました。従来行なわれてきましたPR活動というものは、その場限りの、ひとつのイベント的要素が強かったのですが、そうではなく、元町全体が一丸となって取り組み、もっと将来を展望しつつ、元町というものに対してひとつのイメージづけを確立させて行くようなものが大切だと思います。そういうことを踏まえ、元町の新しいシンボルを募集するという形で、今年の二月、三月と打ち出してきました。

この一年程、元町方面はハーバーランド構想であるとか、メリケンパークの建設と、脚光を浴びていることは事実です。その中で、元町がどのような形づけをしていかなくてはならないか、また我々自身、どう考えなければいけないか、というのが元町の皆んなの一致した意見だと思うのです。それには、この街で商売をしている人達が、やる気を持ってくれることが大切です。そのためには、小規模なイベントみたいなことをいくら行なってみてもあまり効果はありません。出来るだけ多くの商店主や、次代を担う若いメンバーが、ひとつの輪の中で物事を考えていくという、そういう場を設けることが必要になってきます。

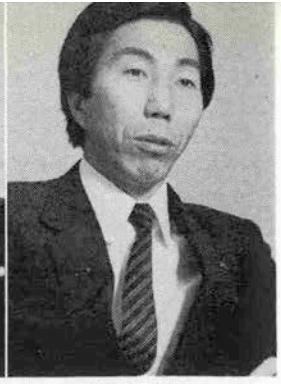
元町グループPR委員会は、そういう意味でも、出来るだけ多くの会議を持つことによって、今までバラバラ

島田　誠さん

村上与利一さん

伊藤　忠徳さん

中川　清さん


大谷　靖幸さん

だった各商店の連帯を考え、ひとつの土俵に上がることに、活動の基盤を置いているのです。

島田　元町は伝統のある街です。元町という名は、神戸にしても横浜にしても、いわば全国に通用するブランドですね。個々の店の名は知らなくても、誰でも元町という名は知っています。このブランドのイメージをもっともっとあげて行きたい。そのための一つの方法として、〝新しい元町〟のシンボルを一般公募しました。これは、三月三十一日で締切り、四月中に発表する予定です。

個々の商売では個店が頑張らないといけないのですが元町全体としての斬新なイメージを打ち出そうという狙いがあります。かつての元ブラ、スズラン灯の時代を振り返るだけでなく、未来へ広がるイメージがあり、故郷の新しさを見つけられる町に変貌することが必要です。

何か元町のすごいシンボルをつくりたいですね。それも単に例えば何かの像が建つというのではなく、一つのマークとかロゴタイプのようなもので、元町の名を冠した新しい商品が生まれる契機となり得るもの、モニュメントとしてのシンボルづくりまでもって行きたいと思っています。この三、四年の元町の新しい流れの中心に腰を下ろすようなものが出て来れば、そのあたりが、これからの元町が面白くなって行く点だと思います。

村上　今までですと各所単位の事業しか行われておらず、連合体としての横のつながりができていませんでした。ところが元町街づくり委員会などができて横のつながりはでて来ました。会としての活動も活発で様々な意見が交わされてきましたが、この五、六年は今後の活動をどうするかという暗礁に乗りあげた感があります。どうしても元町のアイディンティティーが決まらないことには次の展開ができないところにきている。しかし気運は盛り上っており、時期的には非常にいいタイミングに入っており、これからが楽しみです。

伊藤　私は昭和五十三年に元町に出てきて商売を始めたのですが、いわゆる脱サラ組で、元町の文化と伝統が自分自身はっきりつかめていないんですよ。ただ外様として気がついたことはあります。横浜にしても神戸にしても、〝元町〟は居留地の文化の跡を追いかけて発展し、いわゆるハイカラ文化の大きな窓口であったわけです。ところがこの十年程の間で情報がすさまじい効力をもつようになり、元町の昔の役割が年々消失しているようです。私たちが出店した頃は、その消失が頂点に達していた頃でした。そこに乗りこんできたものですから、一日二十四時間あっても足りないぐらい努力して働いていました。現在ではそのような各個店の努力プラス商店街グ

ループの力がなければ、営業成績を伸ばすことはできないと思いますね。

元町は一一〇年の歴史と伝統をもつ半面、それが大きな荷物になっているのも確かです。ですから昔にしがみつくのではなく今から新たに一一〇年の歴史と伝統を作る再スタートをすべきです。そのためのスタッフも揃っていますし、これから元町は始まる、と私は考えています。

中川　元町の歴史は一一〇年になりますが、元町が古い、そして老舗であると言われるゆえんは、常にその時代時代の先頭を歩いてきた商店街であったためだと思うのです。新しいことに挑戦してきたという歴史が、今の元町の伝統をつくったと思えます。だから、これからの活動は、そういった伝統の中に含まれている精神を忘れずにやっていき、ただ単に形が変わるだけではないということが大切です。お客さんに喜んで来ていただくためにも、常ににぎわいのある、「あの店でなければ…」といわれる店づくりをしていかないと…。ある種、差別化のある店が増えていけばいいと思います。PR委員会では、その手助けをしていくつもりです。

下村　人間は鍛えないと体力は落ちますね。商店街も〝手入れ〟をしないと落ち目になります。

例えば鉄道の発達していない時代は宿場町は栄えました。当たり前のことです。しかし鉄道網が広がると駅とその周辺が栄えます。反面、宿場町は没落します。これも当たり前。では今はどうかと言うと、クルマの時代です。駐車場がないと人の来ない時代です。

西武百貨店が大津の辺鄙な所にオープンしたときに、人が来るだろうかと思ったのですが、駐車場が広いために京都などクルマで一時間圏の人がたくさん来ています。同じ西武が筑波への出店を決めたのは、クルマで一時間の距離に七十五万の人口があったからだそうです。つかしんもそうですね。つまり今や人の来る来ないは駐車場のあるなしにかかっていると言えます。

だから元町も意識して駐車場をつくらないといけない。時勢に対応することが必要です。かつて元町は確かに利便性のある町でした。私どもでは、十二月三十日、三十一日は年の内でも一番忙しかった。何故かというと中突堤から淡路島や四国へ帰る人が元町を通るからです

しかし今やフェリーが利用され、元町を通って帰省する人はいなくなりました。

やはり時代の流れ、環境の変化に元町は適応できているのかどうかを考えないといけないと思います。駐車場の問題。これは大きな問題だと思います。

伊藤　駐車場は一番深刻な問題ですね。それさえ解決すれば何パーセントかの売りあげはすぐ伸びます。

中川　大丸前の商店の人たちの間でも、大きなビルを建てて駐車場を設ければいいという意見もあります。

伝統を受けついだ〝ニュー元町〟を

島田　従来の元町は一丁目から六丁目までが、いわばタテ割りで相互に壁があったのが、横断的な委員会が出来て以降、その壁が取れて横の流れはよくなりました。従って今お話のあった駐車場にしても、元町全体としてどう対応して行くか、具体的に計画が検討できる土壌までは出来たと思っています。

ただ元町という商店街が独自で駐車場という地域全体に関わる問題を解決していくのは力不足です。行政の力をどうしても借りないといけない。

今や駐車場一つにしても三宮偏重です。だから元町と行政とのパイプをどう密接なものにして行くか、今後、この問題を詰めて行く必要があるでしょうね。

大谷　駐車場の問題は、商店街だけでは、どうしようもできないかもしれません。しかし、元町を、神戸の中でどういう位置づけをしていくか、そして、少しでもみんなの心の中に、「何とかやってみようか」という意識を浸透させていくことが、我々の役目だと思います。

元町ブランドというものをどういう形で出していけば

いいかという受け皿的な考え方も必要です。例えば、古いものを、いかに現代風にアレンジしていくか、というような…、古いものの良さをうまく表現でき得る街ですし、他所の場所にないものをたくさん持っているのですから、いろんな意味で可能性があり、ロマンのある街だといえます。

武田　神戸は港町です。では港につながったショッピング街はどこかと言うと、これは元町です。歴史的にそうですね。かつては、外国人が、それこそルイ・ヴィトンのバッグをもってメリケン波止場に下り立ちました。人と共に世界のファッションが入って来ました。

港に関連して倉庫業や海運業が発展し、それをサポートするものとして金融機関が栄町あたりに張り付き、その山側に元町があった。さらに山側には住宅が広がる。港とその国際的な雰囲気をもっている商店街が元町であったわけです。今、元町は港とか海とかを忘れてしまったのではないかと思います。船の汽笛が聞こえ、ポートタワーが望めるという、それをもっと売り出すべきです

かつてメリケン波止場や国産波止場を通じて、外国からのハイカラ文化、ファッションの最先端を最初に受け入れたのが元町です。今、それが元町のもつ財産となっていますが、それをもう一歩展開したいのですね。

現在、船荷がコンテナ化されるにつれ、海際が再開発され、メリケンパーク、神戸ハーバーランド構想が進展し、海際が変わって来ています。とくにメリケンパークは元町の浜側です。その受け皿としての元町のよさを売り出して行くということが出来ないものでしょうか。

島田　メリケンパークには国際海洋博物館とかホテルも建ち確かに水際が変わります。元町はそういう変貌への対応が遅いのではないかと思います。下手をするとウォーターフロントに一つの地域が出来、それと三宮と北野が賑って、結局、元町だけが取り残されるということでは実に具合が悪い。早急に対応して行かないといけない。

しかし、ここ一、二年の動きを見ますと、三五〇軒も集まり、東西一・五キロもある商店街が、これだけパワフルにいろんなことをやっている例は他にはないですね。

ただ口で言っているだけではダメで、今やそれを実らせて行くときです。いっきょにガラッというのは無理ですから、小さな事がらを積み重ねて一つの流れをつくることです。町がちょっと変わったな、という感覚をもってもらうことが大切。今年は具体的に設備をつくるなどやりたいですね。

それと商店街は線ですが、界わい性をつくることが大切です。つかしんはそれを人工的につくっている。しかし元町には本来、界わい性がありますが、改めて意識してそれをつくって行かないといけませんね。

村上　私は元町に住んで商売をしているわけですが、家族体制から出る元町の体質がありました。子供が社会人になる頃はまだ親の力が大きく、自分の力を発揮するためには他所へ行って出店するしかないわけです。地元に投資するのではない。地元は古い世代が頑張り、若い者は外に出る、という型が続いてきた。それが低成長時代に入ってきて、ようやく地元を見直そうという方向に向かっていると思います。

伊藤　元町の〝灰色の時代〟から、この二、三年で大きく流れが変わってきています。

村上　今でも親が実権を握って若い芽を育てない所はあるようですが、徐々に変わっているようです。

伊藤　元町が歴史的背景に培われた街であることは確かです。私自身、温故知新という言葉が好きで、古いものを大事にしたいのですが、元町商店街としてみた場合、その背景にしがみついている傾向があるのではないでしょうか。今は街にしても創っていく時代ですから、元町にあるものを新生化して〝ニュー元町〟をつくるという街づくりの意識を持つ発想に変えないといけない。私自身外から来て元町の歴史なりを学んだ訳ですが、現在では昔のバックボーンを捨ててでも〝ニュー元町〟を再生させねばと考えています。

元町に欲しい〝物語性〟

武田　つかしんのようにわざわざつくらなくても、元町には歴史的にも界わい性があります。それをセールスポイントに出来ますね。元町ブランドでもって今まで外へ広げていたのをもう一度見直そうという時期ではありますね。思うに元町が素晴しいのは、ポッと外から来て、儲かったらまたポッと外へ出て行くという人が居ないということと、とくに奥さんがしっかりしていること(笑)。これは元町の魅力の一つです。そういう土着性が元町を支えて来た。これをもっと売り出して欲しい。それこそフロム・モトマチ・ウイズ・ラブですよ。

お話を聞いていてもう一つ素晴しいのは、何かものを造ってそれで終りというのではなく、ソフト面での活動が先行していることですね。ここには可能性があると思います。未来の街・元町があります。

下村　最近では子供の代になると元町に住もうとは言わなくなっていますね。みんな北野がいいと言う(笑)。

食事一つにしても、夜遅い目に食事をしたいと思っても元町には開いている店がない。下手をすると食いはぐれてしまう(笑)。だからもっと人の住める場所にしないといけないと思いますね。

また例えばハワイでは、マンションにしてもダイヤモンドヘッドやワイキキの浜辺が望める高層になるほど値段が高くなります。元町でもビルを高くして海を望むことは出来るわけです。そういういいところがあります。

いい景色を取り入れられ、シャレたレストランや、あるいは一杯飲み屋が元町にあれば元町は生活するのにすごく便利な町になると思います。

武田　便利でアダルトなところが要求されていますね。元町はそういう町になって欲しい。二十四時間活動している町が理想です

今はハイテック時代だと言われていますが、人間は夢を見ないといけない。元町ではどういう夢が描けるのか。時間がかかってもいい、自分が生きている間には享受出来ないかも分からないけれど、しかし夢を描かないといけない。元町ではそれが描けると思います。

この二つの面で元町は可能性のある町だと思います。

大谷　人を誘致するための条件というものは一つではありません。元町にはその条件を満たす要素がたくさんあります。ただ中途半端なものがあるために、もう一つ波に乗りきれないところがあります。しかし、「まだ何とかなる」とあきらめていない人たちが数多くいます。そういう風に考えている人がまだいるかぎり、元町はより良くなり得るでしょう。

島田　元町になないのは、虚構性つまり物語性だと思います。つまりこの町に居ることによって夢が得られる、あるいは絵になるということ。そういうことが北野にはあっても元町には少ない。いかにもショッピング機能のみという感じですね。フィクション性、物語性を元町の街づくりの中に導入することを考えないといけない。

武田　これまでの街づくりは単機能主義、つまり売り場だとか、一つの機能しか考えて来なかったわけです。しかし今後は、ハイブリットというか、いかに多くの機能をそこに入れるかということを考えないといけない。いろんなものがあるということが都会性であるわけです。

だから一つのビルの中に売り場があったり、ホールがあってイベントが行われていたり、さらには住空間があったりということですね。この点でも元町は先取りしている部分があります。

常に何かがある町。これが都会性の象徴です。元町はそれをもっていると思います。そこをもっとピー・アールする必要があるでしょうね。

それとお話に出ていた駐車場の問題。いかに多くの駐車機能をもつか。これは多機能の中の重要なファクターです。これを元町がもって欲しいですね。

（神戸風月堂にて）

田崎真珠㈱
取締役社長　田　崎　俊　作
神戸市中央区港島中町６－３－２
ＴＥＬ（078）302－3321

㈱南インターナショナル
代表取締役　南　　泰　吉
神戸市中央区浜辺通５丁目１－14
神戸商工貿易センタービル1701
ＴＥＬ（078）232－1301

キャンペーン「国際文化都市神戸を考える」の
企画は以上２社の提供によるものです。